

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、3月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（3月）

令和 7 年 2 月 28 日
愛 媛 県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報 2 月 20 日発表（2 月 22 日～3 月 21 日）

< 予報のポイント >

- ・向こう 1 か月の気温は平年並ですが、1 週目は寒気の影響を受けやすいため気温が低く、2 週目は寒気の影響を受けにくいため気温が高くなり、気温の変動が大きいです。

< 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 >

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 30 並 50 高 20% 平年並の見込み	少 40 並 30 多 30% ほぼ平年並の見込み	少 30 並 30 多 40% ほぼ平年並の見込み

2 病害虫の発生予想

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 2 月に伊予柑を対象に越冬病斑量を調査した結果、県全体では発生園地率はやや少、発病度は少の発生である。地域別では発病度が東・中予でやや少、南予で少の発生である（表 1）。

(イ) 甘平は県全体では発生園地率、発病度ともに平年並の発生である。地域別では発病度が東予で並、中予でやや少、南予でやや多の発生である（表 2）。

(ウ) 気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発芽期までに発病枝・葉を除去し、園地の病原菌密度を下げる。

(イ) 強風により枝葉が付傷すると発病が助長されるため、防風垣や防風ネットを整備する。

(ウ) 春先感染防止対策として、発芽前の薬剤防除を行う。ただし、IC ボルドー-66D は、マシン油乳剤との散布間隔を 14 日以上あけ樹勢の弱い樹では使用しない。

表 1 伊予柑におけるかいよう病の越冬病斑量調査結果

地域	調査園地数	発生園地率 (%)		発病度	
		R7. 2	平年	R7. 2	平年
東予	29	48. 3	47. 7	1. 6	4. 2
中予	78	44. 9	48. 7	2. 0	4. 1
南予	24	16. 7	66. 5	0. 8	7. 5
県全体	131	40. 5	54. 4	1. 7	5. 3

表 2 甘平におけるかいよう病の越冬病斑量調査結果

地域	調査園地数	発生園地率 (%)		発病度	
		R7. 2	平年	R7. 2	平年
東予	22	86. 4	64. 1	12. 1	14. 4
中予	43	83. 7	77. 3	11. 3	17. 5
南予	9	66. 7	81. 3	35. 7	21. 3
県全体	74	82. 4	75. 2	14. 5	18. 2

1) 平年：H28～R6年までの9年間の平均値

2) 南予については平年：H30～R6年までの7年間の平均値

(2) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 2月中旬の調査では、寄生葉率、1葉当たりの雌成虫数ともにやや少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 12～1月にマシン油乳剤を散布していない園地では、発芽までに散布する。なお、ICボルドー66D散布予定園地では、マシン油乳剤を先に散布し、14日以上間隔をあけてからICボルドー66Dを散布する。

(イ) 樹勢がやや低下した樹では、高度精製マシン油乳剤（97%）を使用する。

キウイフルーツ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生注意

イ 予報の根拠

(ア) 既発生園地における2月中旬の調査（品種：ヘイワード）では、枝幹部からの赤褐色の樹液漏出は確認されていない。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 枝幹や枝の切り口等からの樹液の漏出や新梢の枯死が発生してくるため、園地の見回りにより初発を見逃さない。

(イ) 発生確認後は周辺樹への拡散防止のため、発病部の早期除去を徹底する。伐採は「キウイフルーツかいよう病Psa3型の防除方針」に基づき発病程度に応じて適切に対応する。

(ウ) 結果母枝の棚付けは確実にを行い、園地の防風対策を強化するなどして、病原菌の侵入口となる枝のすり傷を防止する。

(エ) 作業用器具は園地ごとの専用にして、エタノール等で消毒しながら使用する。

(オ) 発芽・展葉期の感染予防を目的として、発芽前に防除を行う。

野菜

(1) べと病（冬春きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 2月中旬の調査（促成栽培）では、やや少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 換気を図り、ハウス内の多湿を防止する。

(イ) 草勢の低下は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(ウ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(エ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏の菌叢にかかるよう散布する。

(2) ハダニ類（冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 2月中旬の調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 気温の上昇に伴い密度が増加しやすくなるため、圃場観察を行い早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。

(イ) 同一系統の薬剤の連用を避け、気門封鎖剤を含め、ローテーション使用を心掛ける。

(ウ) 薬剤の選択に当たっては、ミツバチ等への影響を考慮する。また、天敵を導入している圃場では、活動に影響の少ない薬剤を選択する。

(3) アブラムシ類（冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 2月中旬の調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察を行い早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。
- (イ) 薬剤の選択に当たっては、ミツバチ等への影響を考慮する。また、天敵を導入している圃場では、活動に影響の少ない薬剤を選択する。
- (4) コナジラミ類 (冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご)
- ア 予報の内容 発生量：冬春トマト・冬春きゅうり 並、冬春いちご やや少
- イ 予報の根拠
- (ア) 2月中旬の調査では、オンシツコナジラミ、タバココナジラミともに冬春トマト・冬春きゅうりで平年並、冬春いちごでやや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 薬液が葉裏までかかるよう散布する。
- (イ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を行う。
- (ウ) コナジラミ類は、きゅうりやトマトではウイルス病を媒介するので発生に注意する。
- (5) アザミウマ類 (冬春いちご)
- ア 予報の内容 発生量：やや少
- イ 予報の根拠
- (ア) 2月中旬の調査では、寄生花率、1花当たりの寄生虫数ともにやや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 主に花や果実に寄生するので圃場観察を行い、発生が認められたら早めに防除する。
- (イ) 薬剤の選択に当たっては、ミツバチ等への影響を考慮する。また、天敵を導入している圃場では、活動に影響の少ない薬剤を選択する。
- (ウ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を行う。但し、除草によって施設内に飛び込む場合があるので注意する。
- (6) ミナミキイロアザミウマ (冬春きゅうり)
- ア 予報の内容 発生量：並
- イ 予報の根拠
- (ア) 2月中旬の調査 (促成栽培) では、発生は確認されていない。
- (イ) 気象予報では、気温は平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 薬液が葉裏までかかるように散布を行う。
- (イ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を行う。
- (ウ) 本虫はメロン黄化えそウイルス (MYSV) を媒介するので、発生に注意する。
- (7) 灰色かび病 (冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご)
- ア 予報の内容 発生量：冬春トマト・冬春いちご やや少、冬春きゅうり 並
- イ 予報の根拠
- (ア) 2月中旬の調査では、冬春トマト・冬春いちごはやや少、冬春きゅうりは平年並の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 換気を図り、ハウス内の多湿を防止する。
- (イ) 過繁茂や軟弱な生育は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (ウ) 発病果や枯死茎葉は感染源となるので、早めに除去する。
- (8) うどんこ病 (冬春いちご)
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
- イ 予報の根拠
- (ア) 2月中旬の調査では、葉の発生はやや少、果実の発生は平年並である。
- (イ) 気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 伝染源となる発病葉、発病果や古葉はできる限り除去し、通風と薬剤の付着性を高める。
- (イ) 果実発病が中心となるため、発病初期の防除に重点を置く。

(ウ) 薬剤散布に当たっては、展着剤を加用し、葉裏や芽の間隙部に薬剤が付着するように行う。

(9) ネギアザミウマ (たまねぎ)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 2月中旬の調査では、平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 薬剤散布に当たっては、展着剤を加用し、葉液が葉の基部までかかるように行う。

(イ) 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を行う。

(ウ) 本虫はアイリスイエロースポットウイルス (IYSV) を媒介するので発生に注意する。

(10) 白色疫病 (たまねぎ)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 普通期栽培を対象とした調査の結果、発生は確認されていない (表3)。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察を行い、早期発見に努める。

(イ) 排水不良の圃場で発生が多いため、降雨後の排水に努める。

(ウ) 発病葉や枯死した葉は感染源となるので、適切に処分する。

(エ) 本病原菌は水媒伝染するため降雨前後の防除が重要となる。

(オ) たまねぎの葉は薬剤の付着性が悪いため、展着剤を加用し散布する。

表3 普通期栽培における白色疫病の発生調査結果

調査年 (暦年)	作型	調査 圃場数	発生 圃場数	発生圃 場率(%)	程度別圃場数				発生 程度	平均発病 株率(%)
					甚	多	中	少		
2025	普通	73	0	0	0	0	0	0	0	0
平年 (5年間)				1.18	0.2	0	0	0.6	0.45	0.28

(11) ベと病 (たまねぎ)

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 普通期栽培を対象とした調査の結果、東予の1圃場で発生が認められたが、平年に比べ発生圃場率は低い (表4)。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 越年罹病株 (葉の黄化・色あせ、草丈が小さく葉身に粉状の灰褐色の分生子が付着した株) は見つけ次第抜き取り処分する。

(イ) 早生種では、球の肥大期になると葉身に淡黄緑色の楕円形の病斑が出始めるため、圃場観察をして発病初期からの防除を行う。

(ウ) 気温が15℃以上で曇雨天が続くと多発しやすいので注意する。

表4 普通期栽培におけるべと病の発生調査結果

	調査圃場 数	発生圃場 数	発生圃場率(%)		発病株率(%)	
			R7.2	平年	R7.2	平年
東予	36	1	2.78	6.7	0.06	0.23
中予	18	0	0	4.0	0	0.03
南予	19	0	0	6.7	0	0.42
県全体	73	1	1.4	6.1	0.03	0.21

※平年：5年間 (R2~6) の平均値

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホームページアドレスは、<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyuboj/>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。